

10

お名前	性別	満年齢	終戦時の年齢	現住所
村田 僑志	男性	86歳	20歳	中宇利

① 8月15日は、どこでどんなことをしていましたか。

中国の湖南省 陸軍峯第108部隊の銃機関銃中隊にいた。

② 終戦のことを、どこで、どのように聞かれましたか。

部隊本部から集合するよういわれ、敗戦の知らせを受けた。同時に、日本字で書かれた勅語や手紙、メモなどは全て焼却し、身の回りのものをまとめるように命令された。

③ 敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

負けたことに対して、とても残念で信じられない気持ちだった。洞庭湖の部隊では、負けているとは思わなかった。ただ、これで生きて帰れることはないと思った。

④ 体験の中で、子どもたちに語り伝えておきたいこと

「音信不通の中国駐留」

(写真：東三河の100年より)

私は、新城農蚕学校*1で軍事教練を受けた。その当時は、勉強だけでなく、出征兵士の家への勤労奉仕や軍事教練に多くの時間をとられ、教練は将校の軍人さんから直接指導された。



▲ 第18聯隊で軍事教練をする新城農蚕学校生 昭和12年頃

昭和19年に志願兵*2として徴兵検査を受けて甲種合格し、出征した。行き先は家族にも秘密だったので、中宇利の人にメモを

渡し、中国へ行くことだけ知らせておいた。その後は、いっさい連絡できなかった。

12月27日に下関から釜山に渡り、列車で北支まわりで南京に入った。揚子江の橋が爆撃でなかなか渡れず、着いたのは20年3月初めの頃だと思ふ。そこでは演習はなく、兵站勤務*3として防空壕を掘っていた。

南京には1ヶ月ほど留まり、私たち初年兵*4は約250名ほどで、洞庭湖にある本部へ向けて行軍した。六日間歩いて一日休むという行軍で、主に鉄道の線路を歩

*1 現在の新城高校の前身で、昭和23年に農蚕学校、高等女学校、鳳来寺女子農学校とともに統合された。
 *2 昭和18年、徴兵年齢が19歳に引き下げられ、17歳未満の志願兵の採用も始まった。学生の徴兵猶予も廃止された。昭和20年6月、男子は15歳、女子は17歳から兵役に服することが定められた。
 *3 作戦軍のために、後方にいて車両や軍需品の輸送、補給、修理や連絡の確保など任務とする。
 *4 陸軍で、入隊してから1年未満の兵士のこと。

いた。毎日、目的地に着くと飯ごうでご飯を炊いた。夜食べる分と翌日の朝、昼の分まで用意した。米は、各地にある駐屯地などから調達できた。2ヶ月近く歩いてやっと洞庭湖に着いた。行軍は大変だった。

20年4月の初めに部隊本部に合流した。このころは戦闘はなく、実戦はなくて済んだ。ただ、部隊の外へ出ると危なかった。

8月15日の終戦になっても、初年兵は10日ぐらい歩伏前進などの訓練をしていた。銃機関銃は55kgの重みがある。それを四つに分解し、竹のソリに乗せて足にくくりつけ、引きずって歩伏する訓練だった。足の皮がむけて大変だった。

この頃、兵舎の外へ出て中国人に殺された者もいた。それまでに、中国人に残酷なことをしたこともあり、憎まれていたのだと思う。初年兵の度胸をつける訓練だといわれ、中国人の捕虜を銃剣で突き刺すことを命令されたこともあった。上官の命令には逆らえず、私は、心の中で手を合わせるしかなかった。

ひと月ほど後、上海に移動させられた。中国軍の支配下にあったが、恐れていたような過酷な労働はなかった。もみをする唐臼ひきをした程度で、兵站勤務のようなものだった。それは意外だった。

21年7月半ばぐらいに日本に帰れるようになった。上海から貨物船で浦賀に入った。航海の途中、妻子ある兵士が二人栄養失調で亡くなり、水葬で海に流された。もう少しで帰国できるころだったのに、本当に気の毒だった。

豊橋に着くと、何と駅がなかった。トトタぶきのホームがあっただけだった。建物らしい建物はほとんどなく、玉川の方までよく見えた。空襲がこれほどまでひどかったのかと驚いた。中国からの郵便はいっさい取り扱われなかったので、家族には自分の生死さえ伝えられていなかった。全く音信不通で、自分が書いた手紙は届いてなかったし、家からの手紙も届かなかった。

豊橋から富岡までバスに乗り、家に帰ると、家族みんな喜んでくれた。しかし、おふくろは病気で寝込んでおり、ひと月あまりして亡くなった。おふくろの死に目に会うことができ、自分の復員を喜んでもらえたことは、何よりも幸いだった。

○ 終戦後は食糧不足で苦労

終戦後は食糧がなく、朝夕は甘酒程度のおかゆを茶わんに1杯、夜は小茶わん1杯の白米で、その辺りの雑草を食べたり、本当に食糧が不足していた。

戦争では、たくさんの若者や一般の人たちが亡くなった。自分の命を自分で守れない悲しい時代だった。

今でも世界のどこかで戦争があるが、何があっても二度とくり返してはならないと思う。



▲ 空襲直後の豊橋の街 昭和20年

(写真：東三河の100年より)